

# 図書館とパンデミック

## －新しい中央図書館に向けた試金石として－

中央図書館長 八角 聡 仁

グローバルゼーションという言葉が頻繁に使われるようになった20世紀の終わり頃から、環境破壊に伴う未知のウイルスの人間社会への流入、そしてかつてない地球規模での大量の人々の移動が、新たなパンデミックを引き起こす危険はすでに指摘されていた（実際SARSやMERSによって一部の国で少なからぬ犠牲者が出たが日本ではさほど問題にならなかった）。また、新自由主義政策による社会的な分断や格差の問題から医療体制の脆弱化まで、これを機に浮き彫りになったとはいえ想定できなかった事態は何一つないと言っている。にもかかわらず、それが現実になってみると、この状況をどう考え、どう行動すべきか、改めて根源的なところから問い直さなくてはならないことを実感する。この非常事態が一時的な流行として元の日常へと収束していくのか、それとも常態化することで社会や文化に不可逆的な変化をもたらすのかも、まだ予断を許さない。

危機的な状況にあって、正確な情報の開示と科学的かつ歴史的な考察が重要なのは言うまでもないが（データの改竄や隠蔽を恣意的に行い、人々の疑問に誠実に答えることもなく、歴史や科学を軽んじて専門家と信頼関係を築けない政府はもっとも好ましくないということになるだろう）、このような時こそ出来事を本質から捉える書物が、不要不急どころか「必要火急」なものとして求められてもいる。インターネットで手軽に得られる情報に飽き足らない多くの人々が、続々と出版される新型コロナウイルスをめぐる新刊書から最新の知見を手に入れようとしたのみならず、人類と感染症との関わりを知るためにア

ルベール・カミュ『ペスト』やダニエル・デフォー『疫病流行記（ペスト）』を、またアルフレッド・W・クロスビー『史上最悪のインフルエンザ』や村上陽一郎『ペスト大流行』を、あるいは緊急事態における安全と自由の相剋について考えるために、ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』やミシェル・フーコー『監獄の誕生』といった古典的な書物を手にとったのである。

新型コロナウイルスによるCOVID-19パンデミックは、当然ながら図書館にもさまざまな問いを投げかけている。多くの公共図書館、大学図書館が、臨時休館やサービスの縮小、イベントの中止などを余儀なくされたが、同時に文化資源の電子情報への転換や公共空間としてのあり方など、図書館の未来をめぐる従来の議論も加速した。国会図書館では資料のデジタル化が急がれるとともに、インターネット送信に関する規制も緩和されようとしている。自由で開かれた図書館という理念と感染防止をどのように両立させるか。人と人との接触に関する価値観、倫理観が大きく揺さぶられるなかで、電子媒体をどう活用し、物理的な場所としての図書館はどうあるべきか。非常時だからこそ、知のインフラストラクチャーとしての大学図書館が担うべき役割も大きい。

近畿大学中央図書館では、授業のオンライン化に伴い、ホームページに「新型コロナウイルス感染症対策特設ページ」を設け、「自宅から利用できる電子図書館サービス」「遠隔授業・在宅研究に役立つ電子図書館サービス」などの情報を公開してその後も随時更新して

いる。4月から6月にかけては大学構内立ち入り禁止措置のため休館せざるをえなかったが、5月11日から宅配による図書貸出サービス（貸出・返却時の送料は大学負担）を開始した。宅配貸出冊数は2020年11月現在で累計7000冊余りに及んでいる。在宅での学修を余儀なくされた学生に向けて、学長、学部長等のセレクトによる「今だから読んでもらいたい本」のプレゼント企画も実施した。ホームページに推薦本リストを掲載するとともに、購入用のAmazon図書ギフトコードを全学生に贈り、「読書を通じて心をほどこき、思考を鍛え、このような状況でもつねに自らの意志で学ぶ姿勢を培うこと」（中央図書館HPより）を促したものである。

例年実施している新入生向けの図書館ガイダンスは、テーマ別の動画を制作して提供する形式とし、6月11日からオンラインでの利用相談も始めた。前期・後期にそれぞれ開催している学修支援セミナーや、大学院生による学修サポートデスクの運営もオンラインで行っている。アカデミックシアターにおけるACTプロジェクトの活動もやむなくオンライン中心となった。大学への入構禁止が解除された6月8日から9月11日までは入替・予約入館制をとったほか、マスク着用、手指消毒や換気の徹底等々、感染防止に万全を期していることは付言するまでもない。

さまざまな分野で「オンライン」の選択が可能になったのは過去のパンデミックへの対応とは異なるところだが、人と本が出会い、本を介して人と人が交流するパブリック・スペースとしての図書館の機能は、オンライン化によってすべてカバーできるわけではない。大学における教育・研究のライフラインとも言える知的資源の活用にも制約が加わる。しかし入館者数、貸出冊数が減少する一方で、各種セミナーへの参加者は昨年度までと比べて大幅に増え、これまで案内を重ねても十分に浸透しなかったオンライン・リソースの利用も増加した（たとえばMaruzen eBook Libraryの閲覧回数は昨年度比4倍以上となっ

た）。モノとしての書物に触れる体験の重要性は大前提としつつも、学外から24時間利用できるデジタル・コンテンツには、利便性に加えて書庫の省スペース化や流通の省力化、また環境への配慮といった点も含め大きなメリットがある。もとより学術情報のデジタル化はインターネットの普及とともに急速に進展しており、感染症の終息が見通せない以上、所蔵資料のデジタル化や機関リポジトリの推進、非接触・非来館型のリモート・サービスの拡充は、これまで以上に喫緊の課題として進めていかななくてはならないだろう。

メディア授業によって「教室」の意味が問い直されたように、人が集まり交わる物理的な場所としての図書館のあり方が見直しを迫られているとしても、もちろんそれが不要になるわけではない。たとえば「音楽を聴く」ことは、19世紀まで生演奏なしにはありえなかった。しかし、複製技術によって録音・再生された音楽を時と場所を選ばず愉しむことが当たり前になると、それはもはや生演奏の二次的な再現ではなく、それ自体が「オリジナル」な音楽体験となる一方で、生演奏が不要となって消滅したわけではない。音楽が場所から解き放たれていく歴史は、むしろ「ライブ（生）」の価値が再認識される過程でもあった。それと同じことが起こっていると考えれば、電子媒体と紙媒体の特性をそれぞれ活かしつつ、両者を有機的に結びつけたハイブリッドな図書館が目指されるべきだろう。中央図書館では所蔵する貴重書のデジタル・アーカイブ化も進めているが、これもリアルとヴァーチャルの利点を相補的に活かす試みだと言える。

オンラインの利用には著作権関連のほか、プライバシーやセキュリティの問題も付随する（たとえばコンピュータネットワークもつねに「ウイルス」の危険にさらされている）。絶えずアップデートされていく情報についてはできるかぎりデジタル化を推進していくことが望ましいが、分野やその性質によっては紙媒体で保持しておくべき知財も存在し

ている。どのような資料体を構築していくかは、目先の利便性だけではなく、「図書館の自由」や「学問の自立」をふまえた長期的な観点からも慎重に見極めなければならない。また、オンライン・リソースの適切で有効な利用のためには、情報リテラシーを高める学修支援も不可欠である(残念ながらほとんどの学生にとってオンライン検索とはGoogleを開いてキーワードを打ち込むことでしかないのが実情だろう)。

中央図書館は2021年度中に10号館に移転し、リニューアル・オープンする予定である。新しい図書館としての方向性は従来検討を重ねてきているものの、今年度の経験をふまえれば、さらに機能的なハイブリッドライブラリー(そこには冊子体と電子資料の融合ばかりでなく、中央館とビブリオシアターという特性の異なる図書館機能の有機的結合など、さまざまな「ハイブリッド」が含まれる)への転換、そしてそれに伴いICTを最大限に活用したスマートライブラリーの構想が急務となる。

「本」というものを、人間の多様な知識や思考をコンパクトに凝縮し、アクセスしやすく持ち運べるようにした「かたち」だと定義するならば、電子書籍もデータベースもまた新たな「本」に違いない。そして「本」を媒介にしてさまざまな関係を生み出す場が「図書館」であるならば、それは単に資料や情報を集積した建築物ではなく、サイバースペースも含めてさまざまな場所をつないだ「ネットワーク」として考えることができる。

キャンパス内の各所に(あるいは東大阪以外のキャンパスも含めて)資料が分散していても、ICタグによる管理の効率化を図れば従来どおりの利用が可能だし、AIを活用して24時間利用可能な無人図書館さえ想定できる(文字どおり人が無用になるわけではないが)。それはまた大学全体を「遍在する図書館」とすることでもある。

図書館を資料が保管される「建物」ではな

く、人と本をつなぐ「ネットワーク」として発想する先には、各キャンパス図書館との相互連携の強化が不可欠なものとして考えられるだろう。また、それを国際的なネットワークへと拡げていくとともに、アカデミックシアターのプロジェクトとも協同して、地域の公共図書館や企業と連携しながら、ものづくりや人づくりに関わっていくことも視野に入ってくる。さらに将来的には、他大学図書館とのシェアード・プリント(分担収集・共同保管)なども模索すべきかもしれない。

近畿大学の学修・教育・研究を支える学術情報基盤としての基本的役割に変わりはないにしても、大学における知の生産・保存・伝達のプロセスを絶えずダイナミックに組み換えて活性化していくことが、新しい中央図書館には求められるだろう。移転に伴い建物としては縮小が避けられないにしても、発想の転換を通して図書館の来たるべきかたちを示していくことはできるはずである。